

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成25年3月 第145号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

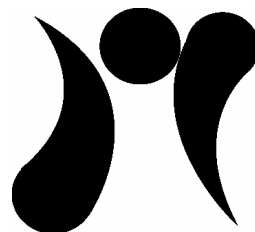
老々介護殺人事件と介護の創造性

今年2月18日の朝日新聞に、「奈良県大和郡山市で今年9日、96歳の夫が認知症の進む91歳の妻を絞殺し、殺人容疑で逮捕された」、との記事が載りました。夫は『高齢の私が先に死ねば寝たきりの妻が困る。介護にも疲れた』と話したという。夫は元警察官、妻は元看護師。2007年春に市内に住む長女から相談があり、訪問介護サービスの利用を開始。今年1月から朝昼晩1日3回の訪問介護を利用して、歩くのがやっとの夫が介護を懸命に頑張っていた。今冬の寒さで体調を悪くした夫は「自分が先に死んだら妻が心配だ」と不安を口にしていたという。この記事を読んで直に思い出したのが、平成21年に加古川で起きた、知的障害を持つ41歳の娘と64歳の母親が無理心中を凶った事件でした。母親は殺人罪で実刑を受けています。

どちらの事件にも共通するのが、デイサービスや訪問介護などの社会サービスを適度に利用して暮らしていた点です。敢えて孤立を選んで暮らしていた様子は見えない夫婦・親子が、生活に行き詰まりを感じた時、社会サービスや他者を信頼して妻や子の身を委ねずに、自分で始末を着ける途を選んだ事に、大きな衝撃を覚えます。社会サービスとしての高齢者介護事業に携わる身にとって、何か大きな責任が残っているようで、無力感を感じます。

96歳と91歳の夫婦で其れなりに暮らせているのは、正に人生の達人です。寝たきりであれ、認知症であれ、最期の瞬間まで懸命に生きる姿は様々な事を他者に伝えています。しかし世間の人々の大半は、介護を迷惑と捉えて、要介護になる事を避けようとします。介護保険制度も予防を重視して、要介護にならないように、重度化しないように努力する事を求め、要介護になった生活に在る価値や役割を認めていません。しかし、生れた人の大半が老いと死に向き合う歳まで生きる今こそ、要介護の生活に在る価値や役割を巡る議論を深め、老いや障害を受け止める思想を確立する必要があります、と思います。96歳の方が妻を殺して始末を着ける背景に、老いと死を受け止める思想が無い社会が映ります。社会を構成して生きる人間にとって最も重要な事は、他者を信頼して懸命に生きる事です。障がいを持って生まれた人も、老いて要介護になった人も、難病で死を間近に控えた人も、老いて死を迎える人も、他者を信頼して身を任せる以外に生きる途は無く、其れが『社会参加』の姿です。

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

懸命に生きる彼らを支える中で、介護する人達は苦悩と葛藤を繰り返しながら、思想に気付き、文化を育み、縁をつなぎ、社会を引継ぐ力を蓄えるのです。要介護の生活は、迷惑ではなく、優れて創造性のある営みです。介護は極めて創造的な行為であり、他者への信頼と思想を育む介護現場が、思想の流れる社会へ改革する原点となり、社会保障改革の根幹を創るように思います。

1946年に近江学園を創られた糸賀一雄先生は、懸命に生きる重度心身障害児の姿を観て『この子らを世の光に』と言われました。しかし60年を経た今も、障害児を生んだ母親の苦悩は消えず、無理心中が絶えません。障害児の輝きが世を照らしている様には見えません。そして今、ダウン症の出生前診断を巡って、若い親たちの間に苦悩が深まっています。一方で、iPS細胞による治療への期待が、難病や障害を持つ人達の間にも広がっています。

出生前にダウン症の診断をするなら、誕生に向けた万全の準備が夫婦にも社会にも必要です。生まない選択をした人へのフォローも重要です。iPS細胞の発見で治療に無限の可能性が広がりますが、一方で生物にとって死は、次の世代を生み出す創造的な営みです。若い命の可能性と、老いて死を迎える命の創造性は、表裏一体の関係であり、人類にとっては同等の価値があります。『榎山節考』は、姥がひ孫の生きる途を開く、崇高な姿を描いています。今は高齢者の医療や介護に多額の資金を費やし、ひ孫の世代に多くの負債を残します。今を生きる為の費用は、今の世代で始末を着けたい、と強く願います。

糸賀一雄先生の訴えから60年を経て尚、変わらない社会を今、早急に変える必要が迫ります。30年後には、団塊の世代の大半が既に人生を終え、人口減少社会になって、社会の様相が全く変わってしまいます。

其れまでに、社会の常識も社会の仕組みも、根底から覆す必要が有ります。根底から変える覚悟が必要です。覚悟を固めて、次の世代への責任を果たす決意を持って、地域包括ケアシステムを構築しなければなりません。地域包括支援センターはその中核的な役割を担い、覚悟を実行に移す為の『権限と能力』が求められます。設置主体である地域行政の『覚悟の程』が、地域包括支援センターの運営方法に現れます。60年間変わらなかった社会を変える為の『知恵とエネルギー』を補給し続ける決意と仕組みが必要であり、安易な民間委託や小手先の権限移譲では必要な権限も能力も伴わず、社会は変わり得ません。

地域社会を根底から変える為には、設置主体と密接不可分な関係を持つ社会福祉協議会の覚悟と責任が重要だと思われまます。社会福祉協議会は地域社会とも密接不可分な関係にあり、地域社会が変わる為には社会福祉協議会が変わる処が原点になるように思います。

地域包括支援センターの運営主体を社協が担い、設置主体の行政との緊張感のあるパートナーシップを確立し、市場原理で動く介護事業との適切な距離を測り、利用者本位の視点と仕組みで、老いや障害を受止める思想の流れる社会を創造し、次の世代に引継いで欲しいと願います。そして、他者への信頼感に応える介護現場で思想を育み能力を蓄積する有為な介護人財が、地域社会で活躍する途を開いてほしい、と切に願います。

せいりょう園 渋谷 哲



M氏のターミナル振り返りについて

ユニット型特養介護主任
入江良行（介護福祉士）

昨年の秋に入所され、今年の2月中旬に永眠されましたM氏について、ターミナルの振り返りをさせていただきます。

M氏は、91歳の男性で、狭心症でペースメーカーを使用しています。見た目は強面ですが、穏やかな性格で、職員の声掛けに殆ど拒否なく応じ、洗濯物を快く畳み、食べ終わった食器を厨房まで持っていく方でした。ご家族も頻繁に面会があり、奥様より「この人、見た目は怖いけど、凄く優しい人なんです。」と言われた言葉が印象に残っています。ご家族の面会があっても寡黙なM氏でしたが、見送る際は、玄関先で見えなくなるまで手を振る姿に優しさを感じました。入所当時は杖歩行でしたが、ユニットで過ごす際は殆ど杖を使用しないで少し不安定な歩行ながらも居室とホールを行き来されていました。

入所されてから約一か月経過すると、空腹の訴えが目立ってきました。172cmと大柄な方なので、食事量を増やしましたが、それでも頻繁に空腹を訴えてこられました。ご家族に相談すると、「家でも同じことが何度もあった。自分の地が出てきたので、ユニットの生活に慣れた証拠かもしれない。」との意見を貰いました。間食のお菓子類をご家族に持ってきて頂き、訴えがある際に職員が小出しに提供することによって、ご本人は満足されていきました。

ユニットでの生活に慣れてきたM氏でしたが、今年の1月初めにインフルエンザに罹患しました。キーパーソンのご長男に状態報告を伝えました。その後、親族よりM氏を案ずる電話が沢山かかりました。その中で、職員間と親族側で話の食い違いの様なものがありました。今後M氏が施設で日常生活を送る際には、様々なリスクがあります。改めて一度親族と話し合う必要があると感じ、後日、親族との話し合いの機会を作りました。親族より、面会が出来ない中で、電話での報告で様々な職員が対応してくれましたが、状態がいまいち掴めず不安でした、との話でした。今後、介護していく中でM氏には介護職だけではなく家族の協力も絶対に不可欠です。今回話し合いの機会を持つことで、互いの蠕りの様な想いを拭うことが出来ました。M氏を案ずる家族の強い思いを感じ、介護側と家族の信頼関係を築くことが必要である事を改めて痛感しました。

約1週間近くで、インフルエンザは完治しましたが、暫く寝たままの生活が続いた為、歩行が困難となり車椅子生活となりました。元々認知症があり、現状を理解できずに車椅子から立ち上がり、日中は転倒しかける事が幾度もありました。夜間はベッドより起き上がり床に転倒して、巡回時に発見することが多かったです。夜間の転倒が続き、その際に左手に大きな傷を作り、縫合しないと無理な状態になる事柄が起きました。その出来事で家族は転倒による骨折などの大きなリスクを案じ、居室に監視カメラの設置やベッド下にブザーがなるような感知器の設置を望みました。家族の強い思いを理解した上で、私からの意見としては、監視カメラや感知器を設置したとしても、100%転倒を防止することは不可能である事。本当に防止するなら手足を縛るなどの拘束になってしまう事などを話し合いました。最終的に、結論は出ずに、夜間の巡回を頻繁にする事ぐらいしか決定できませんでした。しかし、長く話し合う中で、介護側・家族側が本当にM氏の今後の介護について真剣に向き合っている事が実感できました。その時、嬉しい気持ちになりました。私の独り善がりかもしれませんが、こうやってM氏の介護について、互いに意見を話し合える間柄になれた事で信頼関係が結ばれるのではないかと感じ、最期まで家族と向き合いたい思いになりました。

そう感じた矢先に、最期は突然訪れました。2月中旬の朝方、呼吸が苦しそうで反応が普段と全く違っていました。前日まで普通に自力で食事を摂り、前夜にもトイレに行こうと起き上がっていました。突然の急変で直ぐに家族を呼び、主治医からは、心不全との診断がありました。そして、昼に息子・娘に見守られながら M 氏は帰らぬ人となりました。苦しまずに逝かれた M 氏にとっては自然な成行きだったと思います。ただ家族にとっては死を受け入れるには突然すぎたかもしれません。

エンゼルケアの際に、娘さん・奥さんと共に身体清拭を行いました。「本当に優しい人でした。」との言葉が何度もありました。

告別式の喪主(長男)様の言葉に、M 氏は多趣味で人と接するのが大好きな人でした。」との言葉を聞くと、せいりょう園では短い月日でしたが、強面の中で時折見せる優しい微笑みが忘れられません。周囲の人々に愛された M 氏の最期に私は立ち合い、家族と向き合って M 氏の介護について話し合えた事を誇りにも感じます。本音を言うと、もう少し家族と様々な M 氏の介護について話し合いたかったです。

介護職員は、介護技術だけではなく、大切な父・母を施設に預けている家族達(娘・息子等)の為にも、面会時には分かりやすく状態を報告して、やがて必ず迎えるターミナルケアを家族と一緒にになって向き合えるように発信していく力が必要であると強く感じました。

I. ケアハウス等空き情報

○恵泉	: 1人部屋若干	○第二ケアハウス恵泉	: 1人部屋若干
	: 2人部屋若干	○ウレシクはりま	: 1人部屋1室
○ケアハウスアリア	: 1人部屋2室	○青山苑	: 1人部屋2室
○キャッシル真和	: 1人部屋2室		: 2人部屋1室
○ネバーランド	: 1人部屋3室	○めぐみ苑	: 1人部屋2室
	: 2人部屋2室	○清華苑ツバキライ	: 1人部屋1室
○香楽園	: 1人部屋3室	○サリットひまわり園	: 1人部屋2室
○むれさき苑	: 1人部屋2室		

II. せいりょう園空き情報

○ケアハウスせいりょう園: 4室 (バス・トイレ・キッチン付 25㎡)

○サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」

: 4室 (バス・トイレ・キッチン付 33㎡・35㎡)

○グループホーム: 1室 (バス・トイレ・キッチン付 30㎡)

○グループホームまどか: 1室 (トイレ付 15㎡)

<ご夫婦で入居もできる部屋もあります>

[問合せ] せいりょう園 Tel(079)421-7156/(079)424-3433



せいりょう園待機者状況 <平成25年3月13日現在>

○入所判定済み者 411名 (グループの内)

Iグループ…145名 IIグループ…160名 IIIグループ…106名

○入所判定済み者の現在状況

在宅166名/特別養護老人ホーム入所中12名/ケアハウス入居中4名

老人保健施設入所中99名/障害者施設2名/医療機関入院中110名

グループホーム入居中13名/所在不明5名

○辞退その他 せいりょう園入所1名/他施設入所1名/死去6名



入社8年目を迎え、今思う事

調理師 足立 美香



せいりょう園に入社し調理職に従事して、今春で8年目を迎える。ついでこの間まで三十路の壁は厚いと思っていたが、気付けば4月で30歳になる。人生を90年、30年の3回転分とすると、今年「人生1/3終了のお知らせ」の鐘が鳴る。早くも残り2/3、まだまだ残り2/3、どちらの気持ちも同時に感じる。

産まれる時、「一度死なないといけないけれど、産まれてみる?」とは誰も聞いてはくれなかったが、この世は、産まれたからには一度は死ななければならぬというシステムをとっているらしい。

「いつかは必ず死ぬ」ということは理解しているつもりだが、どこかで「自分は絶対に死んだりしない」などとも思っている。

そして楽になりたいからもう死んでしまいたいなどと思ったり、無になること・いつかは無にならなければならないことを想像して、とてつもない恐怖に苛まれたりする。

そう思うこの瞬間にも、産まれたその時から刻まれ始めた死へのカウントダウンは途切れることなく着々と進んでいく。もう、私は1/3回転してしまった。

ふと思う。人は何の為に生まれ、何の為に生き、何の為に死んで行くのだろうか。

連綿と続く人類という大きな歯車を動かす為の小さな部品として回転し、すり減って行く為なのだろうか。

人類の生命糸をひたすらに紡いでいく事に、何か意味はあるのだろうか。

いくら考えてもこの頭から答えは出てきそうに無いが、一つ言い切れるとすれば、それは、「皆今生きていて、皆いつかは必ず死ぬ」という事である。

そして地球上に生きる全ての人は、一度産まれたことがあり、一度も死んだことが無い。

それが故、未知なる「死」への畏怖、そしてそれを一度成し遂げた「死者」への尊敬と畏怖の念を抱くのだろう。

人は結局、「生きる為に生まれ、死ぬ為に生きる」だけなのかもしれない。

昔、老人というのは自分とは別の生き物であると思っていた。

子供⇒大人⇒老人というライフステージの移り変わりを頭では理解していても、おじいちゃんは今からおじいちゃん、若い自分とは別の物のような気がしていた。

老いに人生の有限性を感じ、若さには無限の人生の広がりを感じていた。

はたして今、若者の人生と老人の人生とは異質な物なのかを考え人生を一本の糸ととらえると、それは一方通行で不可逆なものではあるが、その左端・真ん中・右端、共に同じ糸であることに違いはない。

糸は誕生の瞬間に着火され、その片端からチリチリと燃え始め、その終わりが来るまで燃え続ける。

老人だけに留まらず、万人がごく限られた時を生き、万人が産まれた時から死に始める。

生きている全ての瞬間は、死に逝くまでのとある一地点であるに過ぎない。

若者の「これから」も、老人の「これから」も、その役割は違えど等しく有限で、等しく尊い。

そして人は、その有限の人生を快適に楽しく美味しく過ごすことに余念がない。

大昔には獣の肉を生で食っていたものを、そのうち誰かが火で炙って食べ始め、船が造られると臭み消しの胡椒欲しさに命懸けで航海し、又、あやしいキノコを食べて死んでみたりした。

そうした人間の飽くなき探求心と努力と犠牲の上に、現代の食文化が形成され、世界中に数知れない種類の料理があふれ、それでもまだ飽き足らず更なる進化を続けている。
大昔から人間にとって、「食べる」ということは生命保持の手段のみならず、やはり生きる楽しみの一つだったのだらうと思う。
そしてそれは、現代においても変わりなく、子供・大人・老人、各ライフステージを生きる万人が食を楽しむ権利と欲を有していると感じる。

老人になり、中には咀嚼や嚥下が難しい方が現れる。
しかしそれは、「食べ物が食べられない」という事ではなく、「とある状態の物は食べにくい」ということである。
包丁一本なければかぼちゃを切ることすら出来ない私と同様に、トロミが付いた物でなければ食せない方が居る。
逆に言えば包丁さえあれば私はかぼちゃを何分割にでも出来るし、トロミさえ付いていれば食することが出来る嚥下困難な方も居るのである。
それは何も特別な事ではなく、現代にあるツールを使ってより快適に生活しているということに他ならない。
雨が当たらないように屋根つきの家に住んでいる事と、なんら変わらない。

そしていくら嚥下のしやすいトロミの付いた物であっても、それが生命保持の為にただただ体に流し込まれる物であるとすれば、その流動体は食事とは到底呼ぶことが出来ない。
皆が食に美味しさや彩りや匂いや楽しさを求めるように、嚥下困難者にも、食する事を終了した終末期の人にも、当然同等の喜びを求める権利がある。

現在世の中には様々なトロミ剤があり、嚥下をフォローするための各種調理法が開発されており、嚥下困難者も当然至極、食を楽しむ事が出来る社会になって来ている。
これからも更に新しい技術やツールが開発され、嚥下困難食の市場はとめどなく広がっていくのだらう。

そして毎日何気なく使っているこのせいりょう園の厨房や各キッチンのあるところにも、未来の嚥下困難食へのヒントは数多く散らばっている。
包丁よしトロミよし、フードプロセッサーよしトレーよし。足りないものは特に無い。
「せいりょう園、スペシャルな嚥下食への道」
はたして既に賓は投げられたのか？いばらの道をいざ行かん、一人じゃ行けん、厨房職員皆で行こう。

『美しくおいしく安全で楽しい嚥下食』

同じ時間と同じ食材器財を用い、持てる技術を駆使してそれが少しでも実現できるなら、私は出来る限り一食でも多くそんな食事を提供したいと思う。
一回でも多く、利用者にそんな食事を楽しんでもらいたいと思う。
そしていつか、スペシャルな嚥下食がせいりょう園のスタンダードな位置に鎮座すればよいのになと思う。
そしてもっと未来のいつかには、スペシャルな嚥下食を踏み台にしたエクセレントな嚥下食を提供したいと思う。

いつだって誰だって、今この時を快適に過ごし、今この時を楽しみ、今この時食べられる美味しい料理を食し感じたい。
世界中の誰もが、産まれた時から限りある人生の今この瞬間を生きているのだから。



天台宗 鶴林寺 真光院
吉田 実盛 住職

デイサービス 谷澤 高明

1月は休み、2月は講師のご都合がつかずDVDの観賞だったので、今月が今年最初の仏教講話となった。今回は天台宗 鶴林寺 真光院 吉田実盛ご住職に来て頂いた。最初にご住職から「お久しぶりです。前回伺ったのはかなり前です。『千の風になって』が流行っていた頃でした。今日は少しだけ硬いお話をしたいと思います」。との発言で講話が始まった。

ご住職はいろんなところで、多くの人たちから「仏前にお供えするのはどんなモノがいいのですか？精進料理でなくてはならないのですか？」とよく質問されるらしい。「そこで今日はこんなお話をしたいと思います」。一つは精進料理について何十年も考えてきた人と、故人の好物を備えた人との話。どちらが仏様にとって供養になるのか？即ちどちらがより功德になるのか？このことの参考になるお話が『観音経』のなかにあって、お釈迦さんはそこで「気が遠くなるほど多くの菩薩さんに重ねた供養と、一回だけではあるが本当に心の籠った供養とでは違いはないのだといわれる。これを『正等無異：ショウトウムイ』と云うとか。

ここで一つのお話をされた。ある娘さんの銀行員だった父が、退職して1か月後に『癌』を宣告された。父は「最期を自分の家で迎えたい」。という。しかし次第にほとんど食事もとれなくなり、毎日点滴で生をつなぐ日々を送っていたある日、父が娘さんに「卵かけご飯が食べたい」という。娘さんは昔父から聞いたある話を思い出し「すぐに用意するわ！」と言った。父の子供の頃は『卵』は高級品で普段は滅多に口にすることが出来なかった。しかし病気になると口にすることができた。あるとき父は仮病で床に臥せっていると、おばあさんが『卵かけご飯』を作って食べさせてくれたとか。娘さんはとっさに思った。父のこの病気も仮病であつたらどんな

に良いのにと。そうだ、父の前では絶対に泣いてはだめだ。泣き顔を見せないようにしよう。「おとうさん、できたよ。ほら！」父はそれに舐めるように触れた時、一筋の涙を流した。娘さんも泣いた。「おとうさん、今のは、仮病ですよね！」。翌日父は亡くなった。父も自分自身仮病であつたらどんなに良いのにと思っていたかもしれない。娘さんはそれから『卵かけご飯』を口にすることができなくなってしまった。父の5回目の命日にやっと『卵かけご飯』を作って、父の仏前にお供えした。「こんな『卵かけご飯』のようなお供えが出来ればいいなと思います。我々はいろんな形で他人に接することがありますがそんな時、本当に真心の籠もった接し方が只一度でもいいからできれば、それは何千回、何万回する行為に等しいくらい価値があるものではないでしょうか。」

もう一つお話をします。これは孫と祖父の話です。お葬式で弔辞を聞くことがあります。立派な葬式では何人もの人が延々と弔辞を述べひんしゆくを買うこともよく目にします。弔辞ではなく『長辞』と言いたくなるような。そんなある時、80歳のおじいさんの葬式に参列したとき、お孫さんが弔辞を述べるのを見ました。身内の、それもお孫さんの弔辞は稀有なことです。その中学生は祭壇の前に立ち、黙って制服を脱ぎ始めた。上着を脱ぎ、次にネクタイを丁寧に外した。参列者はいったい何を始めるのかと固唾を呑んで見ていた。中学生は今度はおもむろにネクタイを結び始めた。丁寧に丁寧に、しかしまだまだ危なっかしい手つきで結んでいく。結び終わると上着をつけ、祭壇をしっかりと見つめ「おじいちゃん、安心してね！もう一人で、教えてもらった通りネクタイ結ばれるようになったよ。ありがどう。毎日、仏前で合掌するからね」。言葉を越えた真心のこもった行為です。こうしなければならぬと思つて

することよりも、ほんのちょっとした動作でまったく心の籠った事、姿を表現することが可能になる。それは人と人との触れ合いの中で心の籠ったことをちゃんと受け止めて生活し、そのなかで思いの通い合いがあればよいなと思います。

そこでご住職は言われた。「お供えは何でもいいんです。毎日でなくてもいいんです。何回かに一回はちょっと心の籠ったお供えをするといいですね。何が大事なのか？形は崩れていても心の籠ったものが何か出来ればいいなと思います」。今日のお話を聞くと、

私自身考えさせられます。私は両親の仏壇に毎日、線香をたて、水を供えます。お彼岸と盆暮れには墓参もします。決して惰性や、いわんや厭々行っているつもりは全くありません。しかし、これからは本当に心の籠ったお参りを何度かに一度はしたいものだと思います。本当にお忙しい中をありがとうございます。

次回は4月1日(月)です。是非講話を聞きに来て下さい。多くの方の参加をお待ちしています。



平成25年度仏教講話の年間予定(毎月第1月曜日)

4月 1日 5月6日 6月3日 7月1日 9月2日 10月7日
11月4日 12月2日 2月3日 3月3日 (8月と1月は休み)



鍼灸マッサージ治療センターの運営

老いは自然の摂理、いくら努力しても心身の機能が維持、改善できない時が必ず訪れます。その時にも生きる希望を失わず、明日を生きる意欲を生み出す内なる力が人には必要です。今の心地良さが今あることの喜びや充実感につながり、老いの現実を受け入れながら、明日を生きる意欲を回復させて行くように思います。指圧やマッサージは、今の施設入居者や体調不良の人々に対し、心地良さや安息を生む大きな力を発揮する優れた技術であることを確信します。出来るだけ多くの地域の方々に、老いを明るく生きるための内なる力を蓄えて戴きたいと願い、治療に努力したいと思います。

ここに入居しておられるお年寄の方またその人達を介護しておられるスタッフの方々にも平素の疲れや苦痛を除去していただきたいものと思っております。

また鍼治療につきましては、今やわが国よりも欧米の方が積極的のようで、不定愁訴や難病治療に取り入れられ、痛みや副作用のほとんどない治療に人気があるようです。どうぞお気軽にご利用ください。(鍼灸マッサージ師 橋本 圭弘)

料 金：3,000円(30分程度のクイックマッサージ及び部分治療)
5,000円(60分程度の針を含む総合治療)

時 間：13:00~17:00 施術者：加茂正章・橋本圭弘

休 日：加茂：第2・第4土曜日、日曜日
橋本：金曜日、日曜日、祝日

場 所：加古川市野口町長砂95-2 リバティかこがわ2階

要予約：電話にてご予約下さい。

連絡先：090-8238-8511(加茂直通)

079-421-7156(内線59加茂/内線58橋本)

